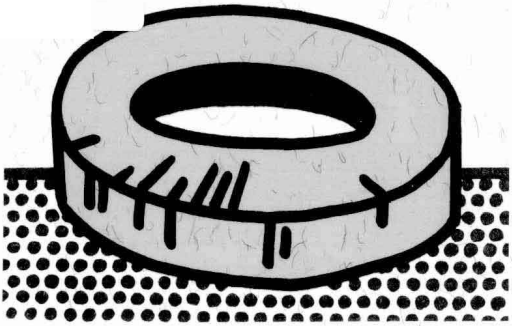

# 井伏鱒二論

松本鶴雄

冬樹社

著者紹介　松本鶴雄（まつもとつるを）
昭和7年11月19日，埼玉県に生れる。早稲田大学ドイツ文学科卒業。
著書　「丹羽文雄の世界」（講談社）
「背理と狂気——現代作家の宿命」（笠間書院）
現住所　埼玉県児玉郡上里町神保原 288

---

井伏鱒二論

昭和53年 5月1日　初版第一刷発行

著　者　松本鶴雄
発行者　高橋直良
発所所　冬樹社
東京都千代田区神田神保町 2-18
郵便番号 101　振替 東京 8-7757
電話　東京 (03) 264-0346（代表）

印　刷　誠之印刷株式会社
製　本　株式会社　岡本製本所

---

© Tsuruo Matsumoto 1978 Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
0095-10269-5190

目次

一章　序にかえて——土着志向とその現実認識　5
二章　「小説など何の益にか相成るや」——井伏鱒二の詩と真実　16
三章　『山椒魚』成立前後——「ぼんやりした不安」と「思ひそ屈した」時代　54
四章　『さざなみ軍記』論——プロレタリア文学の時代的陰画性　93
五章　牧野信一の彼方へ——「大嘘つきの法螺吹き」の文学的内実　119
六章　文章論、「朽木三助」の活写法（リアリズム）——『武州鉢形城』に触れて　139
七章　『黒い雨』論・序——『多甚古村』の戦争体験　179
八章　『黒い雨』論——日常と異常のシーソーゲームの構図　214
井伏鱒二——略年譜　251
あとがき　264

裝幀　三鳴典東

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

# 井伏鱒二論

# 一章　序にかえて

## ――土着志向とその現実認識

田家春望　　高適

出門何所見　ウチヲデテミリャアテドモナイガ
春色満平蕪　正月キブンガドコニモミエタ
可歎無知己　トコロガ会イタイヒトモナク
高陽一酒徒　アサガヤアタリデオオザケノンダ

井伏鱒二『訳詩』より

井伏鱒二の文学は一口に言えば球体のようなものである。いや、球体と言おうか、魚眼レンズのような構造を持った世界と言った方がいいかも知れない。なぜ世界がそのようにこの作者には見えるのか？　これはこの作家の本質にかかわる興味ある問題のように思える。どの小説をとっても極端なものは一切存在しない。極彩色なもの、硬直したもの、すさまじい悪、及びそれに付随した悪意や怒りや、けたたましい叫喚、鬼面人を驚かす式のコケおどし等はまったくないのである。全てが円みを持ち、中心のある何かに向って求心力によって、緩慢に、なだらかに歪んでいるのである。

こうした鋭角のまったく介在しない小説は珍しいと言わねばなるまい。そしてその円みの彎曲の度合に応じて、この作家の作品独特の笑いやユーモアが生じているもののようである。

だが、考えて見れば不思議だ。ここで誰でもが知っている近代小説の講釈をするつもりはないが、作者の内面や性格に由来していると思われる怒りや叫び、あるいは奇癖や激情やそれらが結晶されたのちの悪や悪人等がまったく介在しないで、果して近代のロマンは成立するのであろうか、という疑問がまず浮かぶのである。殆どの小説にあっては男女の愛欲が、あるいは社会的な正義感が、その二つが組み合わされるにしろ、別々であるにしろ小説の骨格となっているのである。小説の方法は変わっても十八世紀以来、あるいは小説の奇形児だと悪評されている日本の私小説にあっても、この点だけは皆軌を一にしているわけだ。しかし井伏鱒二の作品はその珍しい例外と言えよう。怒りや叫びや激情の代わりに苦わらいのようなユーモアがあり、悲しみがあり、人生へのはかなさがあり、作者自身の身の置き所のなきが如き羞らいがある。あるいは営々辛苦してただ生き、自分が何のために生きているのか、自分は何であるのかという近代的というべきか、インテリ病というべきか、つまり殆どの近代小説に登場してくる人物たちが共有しているそうした悩みのカケラも持たず、村上鬼城の句ではないが、「生きかはり死にかはりして打つ田かな」的な民衆への愛惜がある。それ等の上に井伏鱒二の世界は構築されているのである。

言い方を換えればおよそ近代小説らしからぬ小説とも言えよう。近代小説を成立させている要素はことごとく、彼の作品中から放逐されていて、もっと別のものに依拠している世界であるから、流行りの言葉で言えばアンチ・ロマンということにもなるが、そうした名称づけなどはこの際どう

でもいいことで、ともかく、殆どの近代小説が目指してきたモチーフなり、素材なりを少しも顧みないどころか、見向きもしないところに、この作家の独自性があり、またそれが人々に親しまれる反面、ある種の軽さを持って文壇で受けとられている、現象的な側面でもあろう。しかしそれは誤解というものだ。いや、誤解されるくらい彼の魚眼レンズのような世界は解し難いのである。というのも近代小説の約束事から外れた地点で、小説を書くということがいかに至難かということを考えれば、その事情も判らなくもないだろう。

もとより男女の愛情のもつれやそれから派生する悲劇等を小説の筋に仕立てる常套的な手段を用いないとすれば、それに代わるものが必要であろう。そういう展開の仕方でない小説の方法がどうしても必要になってくる筈だ。いや短編の場合はどうでもいい。例えば『へんろう宿』の捨児の話だけでいいわけだ。しかし長編となるとそうはいかない。そのためか、この作者の長編には人々が多数集まる場所を設定したものか、もしくは主人公が各地を遍歴し、多くの人々に会うものかの二つのパターンが一般的であるようだ。前者の一例としては『本日休診』や『駅前旅館』あるいは『多甚古村』や『貸間あり』等、あるきまった場所、病院や旅館や村の駐在所やアパート等を背景にして、そこで生じた生活のさまざまな形態の哀歓を綴り、一挙に集団すべてを描くユニークな方法である。これに対し後者の場合は『さざなみ軍記』『ジョン万次郎漂流記』『漂民宇三郎』等、直接に流浪の生活を扱ったものと『集金旅行』や『引越やつれ』等、主人公が次々と違った土地や生活を移すに応じて、小説の筋が展開されるといった按配のものや『武州鉢形城』や『野辺地の睦五郎略伝』に見られるような、作者が史料を渉猟する形での視点の移動や筋の展開がなされるといった場

合がある。そして沢山の人間が集まる場所を背景とする前者も沢山の人間といやでも応でも出合わざるを得ぬ後者の形式、いずれをとっても確かに人間を個としてでなく、生活集団として把えて描くにはもっとも適した方法であろう。

しかも、かような集団描写にあっては一応主人公は設定されていても尻取りゲームのようにエピソードがエピソードを生み、それぞれが均等に力点を持ち、炉辺談話風に話は次々と展開していく。それは一見、平板で平面的な連鎖のようにも見えるが、その積み重ねの果てに魚眼レンズで撮った写真のような奇妙な、しかしユーモラスに歪んだ独特の世界が現出されるのである。このようにある人物に特別に力点を置かず絵巻物のように物語を綴る方法は我国では珍しいことではなかった。『源氏物語』や『平家物語』、西鶴の小説、その殆どがこの方法であって、その意味から言えば井伏文学はきわめて伝統的であるとも言えよう。だが、全ての人物を均分に見る認識、あるいは人間を個としてよりも集団的に把える認識や人間を内面よりも外側から表象的に把握する認識は古い時代の人間の考え方であったのと同時に、一方ではすこぶる農民的な感覚と言わねばならぬだろう。

ある批評家が井伏文学を絵画的であると言った。たしかにこの作家は画家になろうとしたこともあった。そうしたことから絵画的見方を云々されるのであろうが、しかし、それよりもこの作家が折に触れて書いている百姓一揆やその際のカラカサ連判状と同質なものをいつも私は連想するのである。カラカサ連判状というのは一揆に賛同した署名形式だが、首謀者が誰かを権力側に判らせぬように工夫した書き方で、放射線状に各人が名前を書いていく。どこから始まりどこで終わるのかまったく判らぬ、狡猾な書き方で、しかも均分に責任を分担する集団制約でもある。そして、こう



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

した自己表現を生んだ個を没却した集団的発想はムラという農耕を主とした村落共同体を背景にして、はじめて生れるものであることは論をまたぬことであろう。そういった意味では深沢七郎の『楢山節考』や『笛吹川』や『甲州子守唄』とも非常に近い地点に井伏文学はある。

井伏鱒二は『半生記』という自伝的エッセイで、幼い頃、祖母からよく聞かされた故郷での百姓一揆の昔話について次のように述べている。

《お婆さんは昔噺をするとき、ゆっくり歌うような調子で話してくれた。長い物語だが、話してくれるのはいつも一つことだけで、附近の村々の者が饑饉で難儀したときの事実談であった。今から思うに、この物語は地方的に語りつがれていた祭文か何かであったろう。

「ごんぼうや、ごんぼう、ごんぼうは要らんかなあ。山芋や、山芋、山芋は要らんかなあ。近頃さっぱり、その声きかぬ。ごんぼう、山芋、一つもござらぬ。粟粒、米粒、一つもござらぬ……」

冒頭はそんな文句で、天保時代の大困窮のとき、百姓たちが冥加金を取立てられて窮乏のあまり餓死する者が出る話であった。福山の城の留守居をあずかる辨蔵という大番頭が、二年の御年貢を取立てる指令を出したので、ますます百姓たちは立ち行かなくなった。それで数箇村の者が結束し、加茂村の川下の法成寺村というところの川原に十日も二十日も野宿して、寺の鐘を撞き鳴らし同類を呼びあつめ、大挙して福山城へ攻めよせた。

「うしろ鉢巻、竹槍に、立てたる旗は莚旗。えいえい、おうおう、繰出して、どっとばかりに攻めよせる……」

私はもうその文句の大半を忘れたが、「城では大筒、打ち放つ。決死を誓いし一揆とて、大筒なんぞ怖くない……」というところを覚えている。

まさかと思うが、城では一揆に向けて実弾を打ったと言う。当時の大筒の玉は、たぶん弧を描いてゆっくり飛んで行くのだろう。一揆は玉が飛んで来ると、わあと叫んで玉にあたらないように身を避ける。どうも三発か四発ぐらいは打ったらしいが、傷を受けた者は一人もなかったそうだ。（略）

私は日本の百姓一揆の歴史をよく知らないが、江戸時代に勃発した多くの一揆のうち、成功したのは幾らもないようだ。私が知っているうちで曲りなりにも本懐を達したのは、この福山藩の一揆と南部の八戸城を襲撃した一揆だけである。いずれも大がかりな百姓騒動であった。

天保の饑饉のときの話は私はお袋からも聞かされた。これは昔噺でなく話のついでのとき、ひい爺さんから聞いた話として何度か同じことを聞かされた。おかげで私は子供のとき、昔からの日本のさまざまな年号のうち、「天保」という年号を一ばん早く知った。決して芳ばしい印象の持てる年号ではない。

お袋の話では、天保の饑饉のとき、沖の方の人が（川下の村のことを沖というが）私のうちの背戸にある樫の木の実を拾いに来た。ドングリの実と同じように水につけて渋を抜き、粉団子にして食べたそうだ。私は昭和の戦争で郷里に疎開中、背戸の樫の実を拾って庭鳥の餌箱に入れてみたが、庭鳥は不思議そうに首をかしげるだけであった……（略）》

このあとも百姓一揆の記述は続き、首謀者の庄屋二人が斬首刑になった等とあるのだが、引用が

大変に長くなるのでやめて置く。ともかく「祭文」の形式で語りつがれてきたという長い時間の持続的怨念もさることながら、樫の実の粉団子の話から、庭鳥の餌にしようとしたが鳥さえふり向かなかったというさりげない書き方の中に含まれている諷刺、そうしたものが強く印象に残るのである。井伏鱒二という作家は声を荒らげて権力や時代を批判するタイプではない。しかし、こうしたさりげない書き方の中にいつも権力者を、あるいは時代を容赦なく批判する。同じ『半生記』に井伏が入学した福山中学の話が出てくる。この中学（現・広島県立誠之館高校）の前身は「幕末のころ福山藩主の創立した誠之館という藩校」で洋学校だった。創立した藩主は幕末の老中阿部正弘で、この作家が中学生の頃でもこの藩主は名君として生徒に崇敬されていたそうだ。だが、それに対し井伏鱒二は次のような書き方をしているのである。「私は農家出身で、幾らかそのせいもあるだろうが、中学時代にも阿部正弘公を大して崇めていなかった。幕末のころの私の先祖や近隣の人たちは、殿様を恨む百姓一揆を秘かに歓迎していたと思われる節もあるほどだ。しかし福山の士族出の生徒たちは、正弘公を不世出の名君としていたようだ」（傍点・引用者）と。

こうした、この作家の眼、豊臣でも徳川でもない、薩長でも会津でもない、それ等をむしろ嘲笑するように見上げる土着者の眼は恐らく井伏鱒二の多少シニカルなユーモアとなって、正面から権力に抗するのでもない、もっと柔軟な姿勢をとらせるのであろう。例えば幕藩時代の苛酷な権力に泣かされた話として、食い延しのために四国遍路に出て、行き倒れる百姓の話『虎松日誌』や、生類憐みの令で鞭打たれる餌差しの『侘助』、あるいは荒地の新田開拓で動物以下の生活を強いられる『開墾村の与作』等の作品には支配者の横暴に泣く百姓へのほのぼのとした愛情が注がれている

のだ。そして、かような時代ものとは限らず、時の権力の理不尽を低い声でだが、しかし執拗に呪いつづけるものとしては有名な『遙拝隊長』や戦争中の徴用文士の体験をそのまま描いた『犠牲』等がある。『犠牲』の書き出しは次のような、この作家にしては珍しく声高な語り口になっている。

《「塹壕のなかのことは語らない。」といふ戒めがある。これは戦争経験者の穿身斧だと云つた人もある。戦争は悲惨なものにきまつてゐると前提を置いた上の言葉のやうである。この言葉の裏には「何も今さら云ふな」と極めつけてゐるところがあるやうだ。その睨みが利いてゐる。何だか無気味である。それを意識に入れながら、私は自分の徴用中の見聞を語らうとする。すなわち、少し遠慮しながら言葉を端折つて話すのである。》

こうした書出しで、この『犠牲』は昭和二十六年に「世界」に発表され、河上徹太郎の言葉を借りるなら「理不尽な戦時風景への摘発の見事さに驚かされる」怒りとユーモアの入りまじった作品であった。たしかにこの作家は荒々しく抵抗する勇ましい、人目を引くタイプではない。しかし、この『犠牲』が戦後六年後に発表され、更には二十年も経って『黒い雨』を書く、そうした息の長い持続した時代批判は今日の作家には珍しいと言わねばならない。そして、それは彼が幼い頃、祖母から聞かされた「祭文」形式による、長い期間、支配者の横暴を責めつづけてきた農民の気質と同じ、息の長い、決して怨みを忘れず、しかも勝負をあせらない土着者の現実認識といってもいいであろう。

小説ではないが井伏鱒二のエッセイ集に『七つの街道』という書物がある。文字通り、旅行好き

のこの作家が歩いた七つの街道の紀行文だが、ただ一つ例外は紀行文らしからぬ「久慈街道」である。この久慈街道は岩手県の久慈と青森県の八戸に至るまでの短い街道であるが、幕末の百姓一揆がこの街道を攻め上って八戸城下に迫り、領主に請願を受け入れさせたくだりが、土地の郷土史家の資料や見聞をもとにして詳細に述べられている。小説の方では『野辺地の睦五郎略伝』にも用いられている八戸藩の野村軍記という藩政改革の大立物が、百姓側の資料である「野沢ほたる」には「奥州一の馬鹿侍」ということになっている。著者はこの百姓側の資料と藩側の資料である「八戸見聞録」と高山彦九郎の「日記」に基づいて、当時の大凶作のありさま、野村軍記の不幸な失敗、怒り狂った幾万幾千の一揆のありさまを紀行文から逸脱してまで執拗に追いつづけているのである。こうした執念の中にやはり一見、ユーモアに富み枯淡の境、名人芸といわれる井伏鱒二の隠されたもう一つの「私は農家出身で……」という激しいものを見て、ハッとさせられる。例えば「野草より鶏、犬、牛馬を食ひ尽し、人を食ふに至る。人食ひたるものは、生きるもの百か一もあらず、千万の内、一人、生きるのミ。八ノ戸、二万石の下斗りにても六万人餓死す。」これは「高山彦九郎日記」よりの引用だが、こうした農民の悲惨な記録を、だからどうだという解説や作者の主観を加えず、ただ井伏鱒二は書き写しているだけなのだが、そこでは自分の故郷の先祖たちの福山の百姓一揆の姿がほうふつしたであろうし、ただ、こうした記録を静かに読者に突きつけるだけの方が遙かに無気味でもあるのだ。また同じ「久慈街道」の中で次のようなことも述べている。

《竹槍といふものは、百姓が侍と決闘する場合には、これに限るといふことである。右足の膝を地に折り敷いて竹槍の先を地に伏せて敵を待つてゐる。相手が刀を振りあげて来ると、相手の顔

を目がけて突きあげる。一と突きで倒れてしまふ。相手がよほど腕のたつ侍で竹槍の先を切落しても、ひつそぎ竹になつて反つて勢ひよくその侍を突きさすことになる。このとき、ひつそぎ竹にならないやうに切り落す腕のある侍は、幕末のころなら大藩の剣術の師範に召抱へられる資格があるさうだ。》

考えようによれば、この竹槍論は作者自らが秘かに己れの現実への姿勢を語った端倪すべからざる深慮から出た、ユニークな人生論であるかも知れないし、井伏文学の本質を衝いた暗喩ともとれる言葉である。というのも「右足の膝を地に折り敷いて、竹槍の先を地に伏せて敵を待つてゐる……」といったあたり、彼自身の文学が現実とかかわって発するユーモアや諷刺精神の機能をうかがわせるに充分であるからだ。ともかく井伏文学に散見する、あの諷刺精神は下から上を見上げた時、「相手が刀を振りあげて来ると、相手の顔を目がけて突きあげる」ような被支配者のそれであろう。つまり、きだみのるの『気狂い部落』の世界を逆にしたユーモアなのである。きだみのるは農民達の仕草、気質を面白おかしく外部の目で描いているが、井伏の場合はきだみのるに笑われる側に身を置いて、笑われることをまた笑い返す、そうした支配被支配の間に一つの抵抗感として生じた笑いといっていい。そして、このような笑いは権力者や英雄や知識人、都会人の持つ特権意識とそれに伴った、肩肘張った姿勢を下から見上げた時、笑いのめしたくなる志向性を常に持っている。つまりそれは日本の農民の伝統的なネガティヴな抵抗感でもあった笑いなのである。

このような笑いは椎名麟三や深沢七郎などにもある。いずれも日本の底辺の民衆が長い間伝承してきた笑いである点では一致している。現在でも庶民たちはよく笑う。それが権力構造や都会文化



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo